魔導司書　アルハズラット

神田白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導司書　アルハズラット

【Ｎコード】
Ｎ８５６６Ｊ

【作者名】
神田白兎

【あらすじ】
小学５年生の栞ちゃんは、本が大好きな女の子。そんな栞ちゃんが図書館で見つけたのは、なんとネクロノミコンという魔導書。その魔導書に宿る精霊、アル・アジフに頼まれ、栞ちゃんは魔導書の回収を使命とする、「魔導司書」になっちゃった！　勢いだけで書いた、ハイテンションギャグ魔法少女もの！　暴力表現にご注意を！

祭木栞の受難

「栞ちゃん、そろそろ閉館の時間よ」
そう言われて、女の子は分厚い本から顔を上げた。
少女の名前は、祭木栞（まつりぎ しおり）。歳は十歳で、小学五年生。緩く二つに髪を束ね、眼鏡をかけた可愛い子で、この図書館の常連である。
「あ、すみません。ついつい、読みふけっちゃいました」
栞が丁寧に謝ると、司書のおねいさんは優しく笑って答える。
「いいのよ、別に。この本、片付けておこうか？」
「いえ、自分ですぐに片付けてます。すみません」
横に高く積みあがっていた、ジャンルはバラバラ、大人も手を出しにくそうな厚さの、ハードカバーや文庫本を栞は抱える。
祭木栞という女の子は、完全なる本の虫であった。
読書が好きで好きでたまらない。本さえあれば幸せで、どんな本であっても楽しめる子であり、読む本の中身のせいか、多少ませているが、物静かで大人しい、目立つのを嫌う地味な子。
そんな女の子の運命が、この日、狂うことになる。
「……？　こんな本、あったっけ？」
日に焼けてボロボロな、古くて大きな本。毎日来ている栞には、新刊以外に見覚えがない本なんて久しぶりの発見である。
「洋書かな？」
いくら本好きとはいえ、まだ小学生の栞に洋書が読める訳がない。が、色々な意味で目立つその本に、栞は興味を持ったのか、何気なく手にとって、カビ臭いページを開いた。
この瞬間こそ、栞の運命を決定づけた。

言いようのない違和感が、空気に走る。
元々静かで当たり前の図書館から、本当に音が消えた。
かすかな話し声や足音、人が本を直す音どころか、自分のページ

をめくる音すら消失していることに、栞は気付く。
「――え？　何？　何が……どう……したの？」
大判の洋書に、栞はすがりつくように抱きしめ、きょろきょろと周りを見渡しながら、後ずさる。
が、栞自身の声以外、自分の足音も、体が本棚にぶつかっても、何の音もしない。
栞の心は、不安に支配される。
その不安が、臨界点を超えてパニックを起こす前に、幸か不幸かはわからないが、それは顕現した。
「君が新しい魔導司書（マスター）？」
「え？」
自分以外の声が聞こえた。
高い。けれど、幼さを感じさせない男の声が。
「誰！？」
泣き声に近い声で、栞は叫ぶ。
すると、抱きしめていた本が、栞の手から離れ、手品のようにふわりと宙に浮かんだ。
パニックを超えて、呆然とするしかなくなった彼女の目の前で、本はゆっくりと開く。淡い光を、放ちながら…
その光が、次第に一つの形になっていく。
「初めまして。小さな魔導司書」
それは、人懐っこく笑って、栞に言った。
「これからよろしくね」
本から現れ、そして話しかけてくるのは、奇妙な生き物だった。
全体は、狸とフェレットを足して二で割ったようなフォルムだが、耳は狐の耳を少し大きくした感じで、尻尾は狸によく似ていた。ただし、体は小型犬くらいだが、尾はその一・五倍。しかも二本生えている。
さらにその生き物は、ブーツ、ロングの手袋、マントを着用して、二足歩行。明らかに、現実にいる訳のない動物が、空中浮遊する本

の上に腰掛けていた。
　そしてにこやかに、その生き物は栞に話しかけてくる。
「まずは自己紹介だね。僕の名前は、ギタフ・アル・アジぷぎゃぁっ！！」
　栞はそれを聞かず、本を無理やり閉じた。声以外の音がしないので、生き物の変な悲鳴だけが、空しく響く。
「――夢だ。うん。私、寝ちゃったんだ。昨日もついつい、本に夢中になって、寝不足だったし」
「あの、すみませんがお嬢さん！　夢オチにしないで！！　夢だったとしても、僕を本に挟んで、そのまま本棚に戻さないで！！」
　本にサンドされながら暴れる生き物と、現実逃避なんだか現実回帰の為だか、本棚に生き物ごと本を直そうとする栞の、非常に熾烈な戦いはしばらく続いた。

「……あの……とりあえず……、話を……聞いて……欲しいな」
「……わかったわよ。……どうせ……夢……なんだし……」
　戦いはどちらも力尽きて、一時中断との結果に。
「あのね、お嬢さん、僕は……」
「その、お嬢さんって言うのやめてくれない？　私は、祭木栞。栞でいいから」
「そう？　可愛い名前だね。じゃあ、栞ちゃん。僕の名前は、ギタフ・アル。アジフ。僕も、アルでいいよ」
　謎の生き物はそう名乗り、その名を聞いた栞は思わずつぶやいた。
「……デモ●ベイン？」
　エロゲのタイトルを。
「！？　ちょっ！　何言ってんの！？　設定は確かに似てるかもしれないけど、僕とそのゲームのヒロインは何の関係もないよ！　って言うか、何で栞ちゃんが知ってるの！？　君、まだ小学生だよね！？」
「ＰＳ２版が出てるし、アニメも深夜だけどやってたし、そのアニ

メはレンタルビデオ屋とかで並んでるし、小説だって出てるから、多少知ってたって別にいいでしょ？私よりも何であんたの方が知ってるのかが気になるわ」
アルのつっこみを冷静に突っ込みで返す栞。何故、アルが知っていたかを問われても、不思議生物は気まずそうに目をそらして、何も答えない。
「まぁ、それはどうでもいいとして、……アル・アジフってことは、この本はまさか……ネクロノミコン？」
あからさまに信じてなさそうなジト目で、栞はカビとほこり臭い洋書を見る。
「……君、本当によく知ってるね。うん。栞ちゃんの言う通り、この本は魔導書、ネクロノミコン。僕はその精霊だよ」
「……やっぱりまんまデモンベ……」「スットプ！　待って！　そのネタ、これ以上掘るの禁止で」
エロゲネタは作者の兄のパソコンの中に置いておくとして、ネクロノミコンとは、おそらく世界で一番有名な魔導書である。
ファンタジー系のゲームや小説の中に、アイテムとして登場することも多いから、名前だけでも知っている人も多いだろう。
そして、最強、と名高い魔導書であるネクロノミコンの原典の名は、ギタフ・アル・アジフ。
「最強の魔導書の精霊が、何で尻尾二また狸？」
「いや、そんなこと言われても……。僕自身も、よくわからないよ。この姿であることが、当然って思ってたし。あ、でも、人間体にもなれるよ。なろうか？」
「じゃあなってよ。いくら夢だからって、こんな変な生き物と話すの、なんか嫌」
栞はとことん、今、目の前の出来事を夢だと思い込もうとしている。または、やけくそとも言うが。
「……夢じゃないんだけどなぁ」
あるは少しぶつぶつ言いながら、ネクロノミコンから降りる。

宙に浮かんだままのネクロノミコンのページが、ゆっくりと開いて、めくられていき、アルの体からまた、淡い光が放たれる。
アルの姿が徐々に変化し、人間の青年らしき姿になった時、光は消えて行った。
彼の人間体は、高校生くらいの男の姿。
動物だった時と同じ色合いの金髪はセミロングになり、楕円の眼鏡をかけている。服は、制服っぽいシャツ、セーター、ズボンで、やや弱気そうなイメージはあるが、顔立ちはかなりの美形。
……ただし、耳はそのまま獣耳。
「あざとっ！！」
小学五年生から、辛辣な一言。
「ひどっ！」
「だって、すごくなんかあざとい。金髪・制服・眼鏡の三拍子で十分、狙ってる感、媚売ってますって空気が丸わかりなのに、獣耳って……。尻尾は消えてるのに、何で耳は消さないの？」
「消してない訳じゃないよ！　普通の人には、耳は見えてないはずだし！！　栞ちゃんは霊感があって、魔術に耐性がある体質だから、耳が見えちゃってるの！　って言うか、話を進めさせて！！」
いつまでたってもぐだぐだして、話が一向に進まないことに、少しアルはマジギレしたものの、迫力は残念ながら、全くなかった。
「あぁ、もう！　進まないからもう、単刀直入に言うよ！　栞ちゃん！　僕に協力して！」
「やだ」
「まだ続くから。せめてもうちょっと話聞いて！！」
無理やり話を進めたら、今度は進みすぎた。涙目になりながらも、アルはめげずに説明を続けた。
「栞ちゃん。栞ちゃんは、魔女狩りとか、宗教革命って知ってる？」
「普通の小学生とかよりは、詳しい自信があるよ」
小学生なら知らなくて当然のことを、あっさりと肯定する栞にやや引きつつも、アルは説明を続けた。

「……そう。なら、説明ははしょるけど、僕や大半の魔導書はね、魔女狩りや宗教革命の時に悪書指定されて、ほとんどが破棄されてしまったの。完全に失われたら、まだ良かったんだけど、この世には出来の良くない偽書や写本が、まだまだ残ってるんだ。ここまで、話わかる？」

かなり難しい言葉を使っているにもかかわらず、栞は平然と頷く。心の中でアルは、彼女が本当に小学生なのかどうかを、かなり本気で疑った。

「魔術っていうのはね、計算式なんだ。本質や理論を理解していなくても、式に当てはめたら、たいていは素人でも効果が出る。けど、やっぱりちゃんとしたものじゃないのなら、どこかで破綻する。高位魔術であればあるほどに、その反動は大きい」

引きつつも、理解できているのがありがたいのか、アルの説明はどんどん感情的になっていく。

「魔術」を語る彼の眼は、どこか自嘲を孕んだ、悲しい瞳。

自分を傷つけられたような、辛そうな顔をして、アルは栞に語りかけ続けた。

「……この世界はね、科学とかが進んだと言っても、いまだに魔術や呪法は使われているんだ。でも、昔と違って、薄い知識と軽い気持ちでね……。魔術はちゃんと使わないと、悲劇しか生まれないんだ！！」

泣き出しそうな顔で、涙の代わりに悲痛な思いをアルは零し、叫んだ。

そして、まっすぐ栞を見つめて言う。

「世界にあるのはほとんど僕の、ネクロノミコンの一部なんだ。僕は、僕の知識が多くの人を不幸にさせているなんて耐えられない！

お願いだ！　栞ちゃん！　僕を、魔導書回収を手伝って欲しいんだ！！」

「やだ」

説明しても、同じ即答が返ってきた。

「話は終わり？　じゃあ、私はそろそろ帰って『椿姫』を読みたいから、起きてもいい？」
「待って待って待って！！　まだ夢だと思ってるの！？　っていうかその本、小学生が読んで面白いの！？　つーか読んで良い内容！？」
くるりとターンして、立ち去ろうとする栞の腰に、アルはしがみつく。
「お願い、栞ちゃん！！　協力してください！！　前の魔導司書を失ってから、もう十年たってるの！　ただでさえ、魔術の素質がちゃんとある人は珍しいのに、最近活字離れがひどくて、図書館にきて八年くらいたつけど、僕に気がついて手に取ってくれた人はかれこれ六年ぶりなのーっ！！」
実家に帰ろうとする女房を、必死ですがりつく情けない夫のように、アルは泣きつくが、栞は子供とは思えないほど冷ややかな目で見下ろして、彼を引っぺがそうとする。
「あんた、自分が原因で、他人を不幸にしたくないんでしょーが！本当にそう思ってるんなら、私を巻き込むなー！！」
「ごもっともです！　その通りです！　でも僕は、知識でしかないから、誰かに頼らないと、何もできないのー！
ねえ、お願い！　このチャンスは逃せないの！　最近、近所で悪魔の気配が、レメゲトンの気配がするから、回収したいのー！！」
「……レメゲトン？」
ウザそうにやさぐれていた栞の眼に、興味の色が浮かび上がった。
「レメゲトンって、通称、『ソロモンの小さな鍵』の、レメゲトン？　七十二柱ノ悪魔が載ってる、あの魔導書？」
「え？　あ、うん。本当、よく知ってるね……
うん。あれも、僕から分岐した魔導書の一つなんだ」」
栞は、アルを腰から引きはがそうとしていた手を、考えるように腕組みする。
「……それ、何語で書かれてるの？」

「え？　さ、さぁ、それはよくわからないな。まぁ、たぶん写本だし、使用されてるってことは、英語か、比較的メジャーな言語だと……

あの、もしかして栞ちゃん。……読んでみたいの？」

アルの質問に、栞は「むう～……」とうなった。それは十分、アルに肯定を伝えていた。

そしてアル・アジフも、絶好のチャンス、最高のセールスポイントを見逃さなかった。

「栞ちゃん！　僕と契約してくれたら、世界中の魔導書が読めるよ！　翻訳が粗悪で、内容が破綻しちゃったものじゃなくて、本格正当なのが！！　どんな言語でも、僕が訳してあげれるから！」

アルの一言一言に、栞は「うー」だの「むー」だのうなって、悩むように首をかしげる。陥落まで、あと一撃あれば十分。

「……あのさー」

栞は尋ねる。

「魔導書じゃなくても、翻訳ってできる？」

「もちろん！！」

本の虫はあっさり、陥落した。

魔法少女の災難

ネクロノミコンがまた、ふわりと浮かびあがる。
栞の顔の高さまで上がると、本は再び、金の光を帯びて、五望星の魔法陣を浮かび上がらせた。
「栞ちゃん。そこに手を置いて。君に、僕の知識をインストールするから」
幻想的で、おごそかな雰囲気に呑まれ、栞も少し緊張しながら、それでもためらわず、魔法陣に手を重ねた。
パンッ！
物音は何もしないはずなのに、頭の中で何かが爆ぜ、真っ白になる。
白紙の脳内に、何かがゴリゴリと書き込まれ、白がすぐ真っ黒になる感覚。
一秒も満たない一瞬で、栞の頭の中を黒く塗りつぶす程の「何か」が入ってきた。今はまだ、それがなんなのかはわからない。
そんなことよりも先に、突っ込みを入れたいことが、栞の身に起きていた。
「――――――アル・アジフ。……何、これ？」
「凄いよ、栞ちゃん！　こんなにすぐ、善情報をインストールできただけじゃなく、自動（オート）で魔導司書に変身できるなんて！」
やたらとハイテンションで、はしゃぐアル。しかし栞の方は、絶望しているとしか思えない顔をしていた。
窓ガラスに映る自分の姿を信じたくなくて、嘘であって欲しくて、栞はとりあえず眼鏡を拭こうとするが、いつの間にか、眼鏡はなくなっている。だが、視界はくっきりクリア。
耳の下の方で二つに束ねていた髪は、上の方に移動。いわいるツインテールという髪型に変化している。しかも色は、艶やかな黒から、アルト同じ鮮やかな金髪に。

そして何より、栞の服装……。
ひらひらフリフリ透け透けの、意味をなしていない超ミニスカートがついた、パステルカラーのレオタード。手足には、硬くて重い、籠手と鎧状のブーツ。頭には烏帽子のような、縦長い筒状の帽子。
それはもう、どこの深夜アニメに出しても恥ずかしくないくらい、まるっきり、萌え系魔法少女ルック。
「……アル。……ちょっと来て」
ちょいちょいと手招きして、栞はアルを呼び寄せる。
「後ろ向いて」
不思議そうな顔をしつつも、アルは素直に栞の言うことに従う。
「どうしたの？　栞ちゃん」
その質問には答えず、栞はがしっと後ろから、アルの腰に抱きついた。
そしてそのまま……
「バックドロップ！」
「あにゅうっっ！！」
体格差をものともせず、見事に決めた。
リアルに星をちらつかせながらも、アルは頭を押さえて抗議する。
「な、何すんの！？　何でいきなり、バックドロップ！？　本気で死ぬかと思ったよ！」
「うっさい！　筋肉バスターかまさなかっただけ、ありがたく思え！」
「怖っ！　小学生の女の子がするもんじゃないし、むしろ良く知ってるねと言いたい技をかまされるところだったの！？　って、あだだだぁぁっ！　ちょっ、四の字固めはやめて！　逆エビもいやぁぁー！！」
ギブギブ言っているアルの要望は無視して、魔法少女ルックのまま、やけくそでサブミッションをかまし続ける栞であった。
「私はね、セー●ームーンにもおじゃ魔●どれみにも、プリキュ●

にも、●リカルなのはにも憧れたことはないの！　私の憧れの二次元キャラは、京●夏彦先生の百鬼夜行シリーズの主人公、京極堂！　彼みたいに本に囲まれた家で、本を一日中読んで暮らすのが私の夢なのー！！」

アルをがくがく揺さぶって、栞は半泣きでマジキレする。それにしても、伏字の多いセリフと、枯れた夢である。

「お、おち……落ち着いて……。っていうか……僕が、落ちる……」

「落ち着いていられるか―！！　なに、この体はセーラー●ーン、手足は聖闘士●矢、頭おじ●る丸は！？　何、これ！？　あんたの趣味！？　このロリコン！　ペドフェリア！！」

アルの趣味ではなく、執筆する際のイメージにと、栞をデザインしてくれた作者の友人の趣味です。友情に感謝。

「違うよ！　こんな趣味、持ってないよ！　ロリコンでも、ましてやペドフェリアでもないよ！！」

「うっさい！　あんたの意見なんて聞いてないし、必要ない！！」

泣いて疑惑を否定するアルを引っ叩き、栞は殺気がこもった眼でにらみつける。声もやたらと低くなっていて、もはやどこにも、本好きでおとなしい美少女の面影はない。

「戻せ！　すぐ戻せ！　今すぐ戻せ！　さっさと戻せー！！」

「む、無理だよ！　本人意思で変身したんならともかく、自動変身したってことは、すぐ近くに、危険度の高い魔導書があるってことだから、魔導書を回収するか、魔力が尽きないと解けないよ！」

アルの答えに、栞は死を宣告されたような顔になり、その場にうずくまった。

さんざんボコられたアルだが、自分のせいだと自覚している為、必死でフォローを考える。

「え……えっと……、栞ちゃん！　可愛いよ！　凄く似合ってる！！」

「嬉しくない！　黙ってろ、このペド狸！！」

栞のローリングソバットが、アルの首にクリーンヒット。どうやら、この姿になると身体能力が上がるらしい。
「あぁ、もう！　わかったよ！　やってやる！　レメゲトンさっさと回収して、元に戻って、あんたをシュレッダーにかけて、焼却処分してやる！！」
「やめてー！！」
アルの叫びは完全に無視して、半泣きのまま栞はやけくそでガッツポーズして、ムリヤリテンションを上げる。
「で、どこ？どこにあんの、それは？」
「本当にすぐ近くで気配を感じるから、すぐに行けるよ」
「よーし！　じゃあ、案内して！」
「わかったよ！　あ、でもその前に、図書館の結界を解かなくちゃ」
捨て鉢で上げたテンションが、一気に下がった。
栞は一瞬動きを止め、アルに尋ねる。
「……今、私たち以外の物音が一切聞こえないし、誰も来ないのはその結界のおかげ？」
「そうだよ」
「……それが解けたら、今、こんな恰好をしている私は、どう思われるの？」
しばしの沈黙ののち、アルは栞から気まずそうに眼をそらした。
瞬間、栞のアッパーカットが綺麗に決まる。
「私、痛い子決定か！　私はね、目立つのが嫌いなの！　ひっそりと生きていきたいの！　影日向に咲きたいのー！！」
「ご、ごめんなさい！　ごめんなさい！　あ、そうだ！　屋上にでも上がってから、結界を解いて、そこから空を飛んでいけば！」
「そっちの方が、見つかった時やばいじゃん！　……でも、それしかないか。
何？　箒にでもまたがって飛ぶの？」
「ううん。これで」
言ってあるが差し出したのは、ネクロノミコン。……確かに、栞

ではなく大人でも乗れそうなサイズである。
「灼眼のシャ●の、マージョ●ー・ドーか！！」
栞の突っ込みもむなしく、結局、それ以外の方法を持たない彼女は、大人気ラノベの登場人物のように、本に乗っかって空を飛ぶ。
ちなみにアルは、さすがに人間二人は乗れなので、精霊体……二また尻尾狸に戻って、二本の尻尾を栞に掴まれ、逆さ吊りのまま空中飛行。
「……あの、栞ちゃん？　さすがにこの体勢はいかがなものかと……」
「何か言った？」
口調は友好的だが、冷ややか過ぎる目が、「墜とすぞ」という副音声を、しっかり語る。
「……もうちょっと言ったら、右に曲がってください」
二重の意味で尻に敷かれているアルは、そういうだけで精一杯だった。

レメゲトンの気配を感じる場所に降り、アルはやや声を低くして、警戒しながら語った。
「……栞ちゃん、気をつけて。ここからはレメゲトンだけじゃなく、悪魔の……それもかなり高位の気配がするから」
「推定家賃三万ちょっとの、木造二階建てワンルームボロアパートから？」
シリアスが瓦解するが、実際二人の目の前にあるのは安アパートで、そこから気配を感じているのだから、どうしようもない。
「――栞ちゃん。そんなゴキブリを見るような眼はやめて。僕だって、信じたくないけど、心が挫けそうだけど、本当だから……」
「これで違ってたら、尻尾から真っ二つに裂く！」
外見に不釣り合いな怖いことを言って、栞は問題のアパートの二階に上がり、気配がするらしい部屋のドアノブを回す。しかし、当然と言えば当然だが、鍵がかかっていた。

「あぁ、もう！　面倒くさいな！」
舌打ちして、激しくガチャガチャドアノブを鳴らす栞に、アルは落ち着かせるように穏やかに言う。
「まぁまぁ、それくらいのかぎを開ける魔術なら、すぐに教えて上げれるから落ち着い……」
ベギッ！！
アルが言い終わる前に、ドアノブが壊れた。もとい、壊した。
「ええっ！　何で壊れるの！？　いくら木造だからって、嘘でしょう！？　確かに魔導司書に変身したら、多少は身体能力が上がるけど、ここまでとは……
もしかして栞ちゃんは、基礎である身体強化（ポテンシャル）の魔術を、無意識で使用してる？　だとしたらすごい才能だ！」
「ぶつぶつうるさい」
一人で驚いて、一人で納得して感心しているアルを、ドアの前に残し、栞はドアに隠れるように、引き戸のドアを開けた。
ドシャ！　バシャ！　グシャ！
「ぶはっ！？」
開けた途端、ゴミ袋が雪崩のように崩れ、アルは埋まる。
「あー、やっぱり……。異臭がしてたから、こんな気がしてた。ほれ、埋まってないで、さっさと行くわよ」
かろうじて出ている尻尾を掴み、アルを引っ張り出して、そのまま彼を振りまわしてゴミ袋をどかし、栞は部屋の中に土足のまま入る。
「な、何だ！？　誰だ、お前ら！？」
鍵がかかって、何の反応もなかったので、留守かと思っていたが、家主はちゃんといた。ずいぶん遅い反応だと思ったが、耳にはヘッドホンがまだかかっている。どうもそれのせいで、ガチャガチャうるさくしていたのに、気がつかなかったらしい。
栞は明らかにやる気なさげに、ちろりと家主を見て、すぐに嫌そうな顔になって、アルを睨みつけた。

「……ア～ル～く～ん？　何で、どっからどう見ても、ニコ動マッド見て喜んでる、アニオタ引きこもりニート、良くてフリーターが、レメゲトン持ってんのかな？」
「それ、たぶん僕が一番訊きたい……」
ついにアルが、泣いて答えた。
相手は、ボサボサのロン毛に、ビン底眼鏡、ユニクロらしきTシャツと高校か中学のジャージで、二・三日風呂に入ってなそうな、フケ・垢まみれの、偏見に満ちたオタクイメージ見本のような、二十代後半の男だった。これは、栞でなくとも、大半は厭な顔をする。
嫌々ながらももう一度、男の方を栞が見てみると、彼は俯いて小刻みに震えている。ヘッドホンを外しているので、栞が言ったことが、聞こえていたのかもしれない。
「あ……、やば、怒らせたかも……」
栞が警戒した瞬間、男は椅子から立ち上がって叫んだ。
「キターッ！　魔法少女キターッ！！　金髪ツインテールロリ系ツルペタ魔法少女キターァァッ！！」
狂喜乱舞しだしたキモい生物らしきものから眼をそらし、栞はひとまずアルを踏みつけてから尋ねた。
「あんたのせいで、切実に身の危険を感じるんだけど？」
「ごめんなさい！　ごめんなさい！　本気で本気でごめんなさい！！」
「……主、あまり甘く見るな。あの娘は、主が思っている程生易しい存在ではない。……そうだろう？　ギタフ・アル・アジフ」
氷のように冷たい男の声が、間に割って入った。
「！？　お前は……アスタロト！」
アルが呼んだ名を、知っている人も少なくないだろう。
サタンを支える四大実力者の一人であり、「魔界の公爵」と呼ばれる大悪魔、アスタロト。
その姿は、あまりにも美しい。（信じたくないことだが、おそらく）召喚者とは比べ物にならぬほど、顔の造形は整っており、ポニ

ーテイルにしている黒髪も、烏の濡れ羽色。身なりの、皺などほとんどない礼服で、なにもかもが召喚者とは別次元。
人間とほとんど変わらない容姿だが、頭の羊に似た一対の角と、コウモリのような翼が、人間であることを否定する。
「ど、どういうこ意味だ！？　アスタロト！！」
キモオタが問い詰めると、彼は血のように赤い唇を歪ませて笑い、語る。
「あの娘は、魔導司書。または、魔導図書館と呼ばれる存在だ。世界上うのありとあらゆる魔導式を、魂に刻みつけた、魔導指揮そのもの。
まぁ、見たところ力を得て、日も浅いようだ。甘く見さえしなければ、私や、主の部分写本で十分だ」
そう言って、切れ長い目で栞を見て嘲笑う。
しかし、栞の無表情で言い放った一言で、立場は一変する。
「いつまで、せんべい布団の上で体育座りしてんの？」
「空気読んでぇ―！！　今、ここでそれを指摘しちゃダメ―！　ほら、アスタロトも泣いちゃったじゃん！！」
「ご、……ごめんなさい」
膝に顔を埋めて、マジですすり泣き出したアスタロトに、栞は本気で謝った。
実は、栞もアルも初めから、この狭いワンルームのせんべい布団の上で、肩身狭そうに体育座りしているアスタロトは視界に入っていたが、あまりにもの悲しい光景だったので、スルーしていた。
「……しょーがねーだろ！！　ここしか、俺がいるスペースないんだよ！！」
アストロとはいきなり顔をあげて、涙目でキレた。一人称が、私から俺に変わっているが、おそらく、これが素だろう。
そして確かに、パソコンと本棚とゲーム、フィギアや抱き枕、ゴミ袋で溢れたこの部屋は、万年床くらいしか、スペースがない。
「俺だってなぁ、好きでこいつを主にした訳じゃねーンだよ！　こ

いつがネットオークションでたまたま見つけて、三千円で落札されたレメゲトンの部分写本が本物で、しかも出来が良くて正確だったんだよ！　しかもこいつ、凝り性だから、本格的に召喚されて、嫌でも従うしかねーンだよ！」

結構よく似た事情に、栞はアスタロトに親近感を感じてしまった。

「こいつとはなんだ！？　主に向かってこいつとは！？」

「うるせー！　何で魔界の公爵が、コンビニ飯買いに行ったり、限定版ＤＶＤ買う為に、徹夜でアニメ●トに並ばなくちゃいけねーンだよ！？　愚痴ぐらい言わせろ！！」

オタクとアスタロトが内輪揉めし始め、栞とアルはただぼんやりとそれを眺める。

「――私、帰っていい？」

「……気持ちはこの上なくわかるし、いいって言いたいところだけど、お願い、まだ帰らないで。レメゲトン回収して……」

魔導司書の苦難

一通りオタクに言いたいことを言って、多少は気がすんで落ち着いたアスタロトが、蒲団の上で立ちあがり、栞に向かって言った。
「魔導司書のお嬢さん。主の命で、私は君に回収される訳にはいかないな。……正直、こいつに使役されるくらいなら、お嬢さんに回収されたいところだが、レメゲトンを回収したければ、私を倒せ！
つーか、悪魔らしいことさせてください！！」
「本音が隠す気もなく出てるよ」
ついでに言うと、アスタロトはまだ涙目である。
「アスタロト！　ここで戦う気か！？ボクのあずにゃんや澪ちゃん、長門に性別秀吉に傷がついたらどうする！！」
フィギアや抱き枕のキャラ名を叫ぶキモオタを、三人は壮絶ウザそうに見る。一応、アスタロトは自分の主人の命令なので、心底面倒くさそうだが、その要望にこたえる。
「……わかってる。結界はちゃんと張る」
彼がパチンと指を鳴らすと、栞がネクロノミコンを開いたときと同じ違和感に、周囲は包まれる。栞が足を踏みならしても、何の音もしない。
「さぁ、これで周囲に遠慮はいらない。思う存分、戦おうではないか。小さな魔導司書」
「背景変わってないから、いくら格好つけても、悲しいだけだよ」
「うっさい！！　戦え！！」
栞の突っ込みに、アスタロトは素に戻ってキレる。
「まったく、何なんだ、この魔導司書は……。異様に若い……というか幼いし、精霊は何故かズタボロだし、恰好は奇抜だし、そもそも名前は何だ？」
「格好のことは言うなー！　って、名前？」
名前に反応した栞に、アルは慌てて、相手には聞こえないように

小声で忠告した。
「本名を教えちゃダメ！　悪魔に名を知られるってことは、魂を捕われるってことだから。……けど、何でもいいから、名前は名乗って。名前は、存在の証。今、君の魔導司書には名前がないから、存在が希薄で弱い。名がないと、本領発揮ができない！」
「……そーゆー事は、もっと早くに言え！」
　そもそも栞には、本名を名乗る気などさらさらない。栞は今の自分を、自分だとは絶対に思いたくないし、さっさと元に戻って帰りたい。なので、本領発揮できずに長引かせたくないので、栞はテキトーに名乗った。
「――私は、え～と……、あ、アルハズラット！　私は、魔導司書アルハズラットだ！！　……って、本格的に魔法少女っぽくしちゃったー！！」
　自分で名乗って、自分で大ショックを受ける栞。
「……よく知ってるね。ボクの作者の名前を」
「なんだかよくわからないけど、アズたん萌え～」
「――戦ってもいいか？」
　自体はグダグダのまま、一向に進まない。
「あぁ、戦うよ！　戦うさ！　そしてさっさと終わらせて私は、日常に帰るんだよ！！」
　やけくそでテンションを引き上げて、栞ことアルハズラットは、アスタロトと対峙。
「さぁ、どこからでもかかってこい。どうせ、まだなりたての素人だろう？」
「そうだよ！　まだ一時間もたってないよ！！」
「マジでなりたてほやほや！？　……まァ、それはいいとして、一応私の元は天使だ。慈悲として、初めの一撃は受けてやろう」
　かなり無理をしてアスタロトは、シリアスな空気を作り上げる。が、やはり場所は蒲団の上なので、本当、全てがもの悲しい。
「……そう。じゃあ、お言葉に甘えて」

「アルハズラット！？」
彼女は、アスタロトに向かって走った（走る程の距離もないが）。
おそらく、彼女は魔術に関して天武の才を持つが、それでも魔術の存在を知って、まだ一時間もたっていないことに変わりはない。アルの助言なしでは、まだろくな魔術も使えない彼女のとった行動は……
「ヤクザキック！！」
「ごふっ！？」
「「魔法少女にあるまじき技が出たー！！」」
オタクとアルの突っ込みがハモった。
「魔法少女言うなー！！」
鳩尾にヤクザキックをクリティカルヒットされて、うずくまる大悪魔をシカトして、アルハズラットはその単語を否定する。
「！　アルハズラット、危ない！！」
アルの叫びに、彼女は気付く。
痛みに呻いているだけかと思っていた、アスタロトの口から洩れる、不審な言葉に。
「――アルドニ・ニサケニブ・カレボクラダブラゾル・アーメン」
呪文らしきものが終わった瞬間、アルハズラットは軽々、吹き飛ばされた。
方向は、本棚。
「アルハズラット！！」
結界が張られているので、音はせず、本棚から本がなだれ落ちることもなかった。
そして、痛みもない。アルが飛び出して、アルハズラットを本棚直撃から、防いだから。
「アル！？　アル・アジフ！？」
初めて、彼女はアルを心配そうに呼ぶ。
彼は、痛みに耐えながらも、優しく微笑んだ。
「……アルハズラット、大丈夫？」

彼は、自分のことなど放っておいて、少女を心配した。
アルハズラットの返事、首を縦に振るのを見て、アルは緩く笑う。
「……良かった。……ごめんね。こんなことに巻き込んで。でも、君は女の子だから、……とても可愛い、戦いに何かもったいない女の子だから……、傷だけは絶対につけないよ。何があっても、守るから。約束するよ」
「大した忠誠心だな。しかし、才能あるとはいえ、そんな素人娘に、私が倒せると思っているのか？」
立ち上がったアスタロトの目は冷たい。冷酷無慈悲な悪魔が、そこにいる。
彼の言葉に、悔しそうに顔を歪めるアルハズラット。
しかし、アルは笑ったまま、彼女に言いきる。
「大丈夫。君なら勝てる」
それは、気休めなんかではなく、確信に満ちた声。

ほんの少し、アルトアルハズラットは会話して、それからアルハズラットは立ち上がる。
「足掻くか？　いいだろう。非力な人間の足掻きは、滑稽であり、美しい」
「滑稽なのは、あんたでしょうが。何やっても、美しくないけど」
十歳らしくない冷めた顔で、彼女は嫌みを憎まれ口で跳ね返す。
そして、右手でネクロノミコンを胸に抱き、左手を高く掲げる。
『魔術は計算式だって、言ったでしょう？　アルハズラット、君はすでに、この世のあらゆる魔術の式を知っている』
アルに、アスタロトに、そしてほとんど運だけで彼を召喚した男にも感じられるほど高密度の魔力が、アルハズラットの左手から奔流する。
初めは、不可視な力そのものであったが、次第に光の粒子となり、さらにその粒子が、何かを形作る。
『僕が君にあげられるのは、それだけ。その式を理解して、実行す

るのは、君の実力。君にしかできないこと』
（まずい！　この娘の才能、半端ではない！！）
アスタロトは詠唱さえせず、同じくらい高密度の魔力を撃ち出した。アルハズラットの小さな体など、容易く四散できる程の魔力。
バチッ！！
声以外の音がしないはずの空間で、アスタロトの魔力は、爆ぜる音を立てて、霧散する。
アルハズラットの方は、傷一つなく、魔力で何かを構築し続ける。
「ま……魔障壁！？　これほど、強固なもの！？」
「な、何だ！？　何が起こってるんだよぉー！！」
主の無様な質問に答えている余裕は、アスタロトにはない。
魔障壁とは、魔術を行使する際、無防備な術者を守る為の狭半にな結界であり、その強度は行使している魔術の強さに比例する。
こんなキモいオタクに使役されているとはいえ、大悪魔であるアスタロトの攻撃を防ぐほどの防御壁……
「……一体、貴様は何をする気だ！！」
『魔術とは、異端。魔術師とは、異端を受け入れた者。その異端を、自分の内側から、世界へ、外へ出し、創造・構築する者のこと。
君なら、簡単なはずだ。たくさんの趣味嗜好、無限の価値観や世界観が詰まった本（セカイ）を知って、それらを受け入れ続けた君ならば！！』
アルの言葉通り、アルハズラットは、栞は真っ黒に塗り込まれ、刻まれた魔術式の中から、今、一番必要としている式を選び出し、応用し、編み出している。そこには、日常の常識はなく、無理だ、あり得ないという疑惑もない。
出来るという確信を以て、それは生み出された。
――やたらとぶ厚い、一冊の文庫本が。
「「「は？」」」
三人の男の声がハモる。しばし沈黙が続く中、アルハズラット本人だけが、満足そうな顔をしている。
沈黙を破ったのは、アル。

「……あの、それをどうする気？」
「こうする気。鉄鼠シュート！！」
タイトルから取った技名を叫びつつ、サイコロ小説を勢いよく、アスタロトに向かって投げつけた。　それは彼の顔面に直撃し、アスタロトはぶっ倒れた。
「結局、物理攻撃！？　既存物とはいえ、無から有を生み出す大魔術の結果がこれ！？」
ヤクザキックとは大差のない攻撃に、アルは激しく突っ込むが、アルハズラットはそんなもんもちろん聞かず、前よりさらにハイスピードで、また何かを生み出した。
「絡新婦チョップ！！」
今度はレンガ本の角を使い、アスタロトの首にチョップ。しかも連打。
「ぐはっ！　ちょっ、ちょっと待たんか！　ぐえっ！　ちょ、マジやめ……、かはっ！　馬乗りでこれはきつい！　つーか、この本、魔力でコーティングして、強化してやがる！！」
「うっさい！　さっさとくたばれ！　私は早く元に戻って、帰って、今日買った『筆談ホステス』と、『１Ｑ８４』を読んで、図書館で借りた『人間失格』と『椿姫』読んで、久々に『全てがＦになる』と『パラサイト・イヴ』を読み返して、友達のお兄さんから借りた『北斗の●』を読みたいのー！！　だから、くたばれぇーッ！！」
いつの間にか、抱えていたネクロノミコンは放り捨て、アスタロトをどつきまわすのは文庫本ではなく、ゼクシィになっている。大悪魔に馬乗りになって、超ド級結婚式情報雑誌で殴りまくっている現状に、突っ込みを入れられる者は誰もいない。
「……読む本、多っ」
「……全部、小学生が読む本じゃないと思うんだけど」
せいぜい、このくらいの突っ込みで限界。
「わ、わかった！　降参！！　お嬢さん、降参するからやめろ！！」
アスタロトの懇願に、アルハズラットはぴたりと猛攻をやめた。

重さの割に安い結婚雑誌は、光の粒子に戻り、崩れる。
「……そう。じゃあ、これで一件落着と言いたいところだけど」
「……だけど？」
激烈に嫌な予感を感じながら、アスタロトはいまだにマウントポジションを取っているアルハズラットに、オウム返す。
「私の腹の虫、まだ治まってないの」
アルハズラットは高く両手を掲げる。光の粒子がまた、何かを構築する。
生み出されたものは……
「ちょっと待てぇーッ！！　それ、本気で死ねる！！」
「広辞苑クラッシュ！！」
広辞苑を重力と腕力に任せて思いっきり、躊躇いなくアスタロトの顔面に叩きつけた。
声も出せず、かろうじて死なず、彼は気を失った。

「……さて、悪魔の方は片付いた」
ゆらりとアルハズラットは立ち上がり、アルとお宅の方に振り返る。ビビる必要のないはずのアルまで、真剣に怯える程、空気が怖い。
「次は――」
「ご、ごめんなさい！　すみません！　レメゲトンの写本はそこのパソコン置いてある机の引き出しに入ってます！！」
オタクニートは泣き叫んで、靴もはかずに逃げ出した。
「逃げんなボケっ！！」
「待って！　アルハズラット！　いや、栞ちゃん！　追う必要はないよ！」
アスタロトが気絶して、結界が解けたらしく、ドタバタと騒がしく足音を立てて追おうとする栞を、アルは必死で止める。
「あいつの言ってることは本当だよ！レメゲトンは、あの机の中にある。追う必要はないよ！」

「いや、追う！　私はあの童貞に、ずっと視姦されてたの！　ぶっ殺さなくちゃ、気が済まない！！」
「栞ちゃん！　意味わかって言ってるの、それ！？　あ、やっぱいいです。意味は言わないで」
小学生にあるまじきことを叫び、栞はアパートから出るが、オタクはすでに二階から降りて、、だいぶ走っている。
がしっ！
「え？」
アルは尻尾を二つとも、栞に掴まれる。
そしてそのまま、ぶん回される。
「おりゃあぁぁぁーっ！！」
「ぎゃー！　な、何！？　何ぃーっ！？」
思いっきりぶん回し、加速をつけて栞はアルを……
「飛んでけぇー！　アル・アジファタークッ！！」
ぶん投げた。
「ひゃあぁぁぁーっっぅぅ！！」
「へ？　って、うわぁー！？」
パッコーン！　と良い音はして、アルはオタクの頭に見事、ストライクを決めた。
栞はそれを見届けた後、ニートの机をあさって、古臭そうな本のページの切れ端を発見する。
「で、アル。これをどうしたらいいの？　あれ？　いない。……あ、そうだ。私が投げ飛ばしたんだ」
ひどいことを言われているのを、気付いているのかいないのか、アルはぶっ倒れながら、しくしく泣いた。

アルを回収して、そしてレメゲトンの写本も回収。
初めに、栞にネクロノミコンの情報をインストールしたときと同じように、浮かび上がった魔法陣に手を重ねたら、回収は完了。
あとは写本を燃やすと、気絶していたアスタロトは、音もなく消

えた。
それと同時に、ぽんっとコミカルな音がして、栞の姿も元に戻る。
「……やった。元に戻ったー！！」
年相応な無邪気さで、本気で喜ぶ栞。
「まぁ……、何かいろいろ予想外なことがありすぎたけど、栞ちゃんに傷一つなくて良かったよ」
ズタズタボロボロボコボコでも、アルは笑う。確かに彼が悪かった面も大きいが、こんな目にあっても笑えるとは、心の広い奴である。
「……そうね。あとさ、アル。……助けてくれて、ありがとう」
栞は初めて、アルに笑いかけた。幼く、優しい、柔らかで可愛らしい微笑みに、アルは少し見蕩れた。
（――こんな風に、笑える子なんだ）
アルも少し、はにかんで笑う。
「ま、それはいいとして」
アルの感激に余韻も残さず、栞はころっと笑顔から仏調面に戻って、オタクの部屋から週刊・月刊の漫画雑誌を大量に抱えて、外に出る。
そして外のゴミ捨て場に、一番下にネクロノミコン、その上に何冊も雑誌を積み重ねておいた。
「……あの、栞ちゃん？」
「助けてくれたお礼に、シュレッダーにかけるのは勘弁してあげる。良かったね！　運が良ければ、すぐに拾ってもらえるよ！！」
そう言って栞は、またにっこり笑う。先ほどよりもはっきり笑っているが、ものごく嘘くさい。
「ちょっ！　栞ちゃん！！」
「じゃ！　そういうことで！！」
片手をあげて、そしてダッシュ！
アルの声が届かぬ所まで、インドア派とは思えないほどハイスピードで、栞は走り去って行った。

「栞ちゃぁぁ～～～～ん！！」
アルの呼びかけを無視して、栞は結局家まで走り切った。
「……た、ただいま……」
「あら、栞ちゃんお帰りなさい。今日はずいぶん、遅かったわね」
「……何かちょっと、……色々あって……」
母親に生返事で返し、栞は息を整えつつ、二階の自分の部屋へと向かう。
「……あ～、疲れた。体より、精神が疲れ果てた。……とりあえず、本を読んで落ち着こう」
ガチャリと、整理整頓されてはいるが、本だらけの雑多な自室を開けると……
「……や、やぁ。……栞ちゃん」
部屋の真ん中で、狸バージョンで、気まずそうにネクロノミコンの上に、ちょこんと座るアルがいた。
「――何で、いるの？」
変身した時と同じ、絶望しきった顔で栞は尋ねる。
「え、えっとね……。あの……アスタロトが言ってたように、君は魔導図書館とも呼ばれて……、君自身が僕の、ネクロノミコンの容れ物何だ……。だから、一定距離を離れると、自動で君の……元に……」
「お母さーん！　今すぐに、シュレッダー買ってぇ―っ！！」
「いやぁぁー！　やめてぇぇー！！」
こうして、栞の最悪の日常が始まった。

魔導司書の苦難（後書き）

なんか続きそうな終わり方ですが、これにて終了です。
……信じられないことにこれ、学校の「文章概論」って授業で、課題として提出したものです。もちろん、魔法少女ものを書けなんて言われてませんよ。短編小説を書けと言われて、これを書いて出しました。
……先生。とりあえずごめんなさい。

ノリと勢いだけ書いた駄作ですが、完読ありがとうございます。
もしよろしければ、感想もどうかお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8566j/

魔導司書　アルハズラット

2010年10月8日11時59分発行